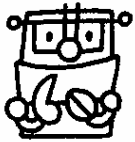


小 / 理科 / 6年 / 生物と環境 /  
植物の体とはたらき / 理解シート

## 葉のデンプン調べて、なぜ、葉を漂白液につけるの<sup>ひょうはくえき</sup>



デンプン調べて使う、ヨウ素液の色の変化は、葉の色が残っているとわかりにくいいためさ。

デンプンがあることを確かめるのに、ふつうは、ヨウ素液をつけて、青むらさき色になるかどうかを見ます。ジャガイモやパンの切り口などのように、白いものなら、ヨウ素液をつけて色の変化がすぐわかります。こい緑色の葉などは、そのままでは、色がついたかどうか、見分けにくいものです。

そこで、葉の緑色や赤い色がとけやすい、あたためたアルコールに葉をつけ、色素をとけ出させて、色をぬきます（使っているのは、漂白液ではありません）。

色素をぬかれて白っぽくなった葉には、アルコールにはとけないデンプンが、そのまま残っています。そのため、ヨウ素液でかんたんに、デンプンのあるなしが、判定できるようになります。

### 葉の中のデンプンの量は、日光に当たった夕方が多い

1日、日光をさえぎった葉は、ヨウ素液をつけても、白っぽい色のままで、デンプンがつくれなかったことがわかります。日光を当てて、夕方とった葉には、つくられたデンプンがたくさんあって、こい青むらさき色になります。

葉でつくられたデンプンは、夜のうちに、水にとける別なものに形を変え、くきや根などに送られます。そのため、早朝とった葉は、実験すると白っぽい色のままで、デンプンがほとんどないことがわかります。

水にとけないデンプンは、形を変えないと、運べないのね。



もっと知りたい人へ：「葉に日が当たると、なぜデンプンができるの」も見てみよう。